



## 沖縄 怒りを結集した6.19大集会

被害女性追悼・辺野古座り込み激励・県民大会参加報告（水久保文明）



「怒り、悲しみ限界 6万5000人結集」――。

6月20日の琉球新報は、1面と終面を使った見開きで、沖縄県民大会の模様を伝えました。その場に居合わせながら、改めて日米安保条約の理不尽さと、日本政府の沖縄県への明らかな“ヘイト策”に憤りを抑えきりませんでした。

参加者4人が行動をともにし、那覇には17日金曜日の夜入り、翌18日は花束を持って殺害された女性が遺棄された現場を訪ねました。周辺にはたくさんの花が供えられ、道路にも100㍍にわたって花や飲み物が置かれていきました。沖縄の人たちの追悼の思いと、怒りの現れではないでしょうか。

現場には黄色のテープが張り巡らされており、そこから奥には入れません。米軍の専用敷地になっており治外法権だからです。捜査が遅れたのはそのためだとも言われていますが、加害者の元海兵隊の米軍属はそれを知っていたのかと思うと怒り増幅です。

そこを後にして、辺野古に向かいました。新基地建設に反対して辺野古漁港にテント村が設置され、監視活動が続けられています。この日ちょうど、座り込みを始めてから4444日という節目でした。

座り込みをやっている人たちに、前もってホテルに送っておいた山梨の一升瓶のワインと、赤旗の寄せ書きを渡しました。寄せ書きの「JAL争議団」の文字に



声震わせ訴える名桜大学の玉城愛さん



不退転の県民の怒りを訴える翁長雄志知事



新基地建設阻止座り込み4444日の節目の日に寄せ書きとワインを持って激励。青空の下、辺野古の海を守り、海兵隊を撤退させる決意は固い。

驚いていました。もちろん、喜ばれたのはワインだったことは言うまでもありません。

19日は県民大会を前に、普天間基地が一望できる高台に行きました。オスプレイの姿も見えます。飛行場の際まで住宅が建っています。日曜日であり、飛行機は動いていませんでしたが、いかに危険な飛行場であ

るか、それも“一望”することができました。

午後、モノレールを利用して、県民大会の会場・奥武山（おうのやま）公園に移動。1時間も前から参加者がぞくぞくと駆け付けていました。そのほとんどが亡くなった女性への追悼を意味する、黒い服を身につけていました。

県民大会は主催の「オール沖縄」を代表して4人が発言。そのなかの一人、名桜大学の玉城愛さん（21）は涙ぐみ、声を震わせながら被害女性に語りかけます。

「あなたのことを思い、多くの県民が涙し、怒り、悲しみ、言葉にならない重くのしかかるものを抱いていることを忘れないでください」「同じ世代の女性の命が奪われる。もしかしたら、私だったかもしれない。私の友人だったかもしれない。信頼している社会に裏切られる。何かわからないものが私をつぶそうとしている感覚は、絶対に忘れません。」

厳しい批判も出ました。

「安倍晋三さん。日本本土にお住いのみなさん。今回の事件の『第二の加害者』は、あなたたちです。しっかり沖縄に向き合ってもらえませんか。いつまで私たち沖縄県民は、ばかにされるのでしょうか。パトカーを増やして護身術を学べば、私たちの命は安全になるのか。ばかにしないでください。」

一昨年、ジュゴンを守る国際会議が開かれるということで、会場となった彼女が学ぶ名桜大学を訪ねたものの、海外の報告者のビザがとれないということで流れてしまいました。が、名桜大学は名護市内の広々とした敷地にあり、整った自然環境の中で学ぶ彼女の姿とオーバーラップし、その言葉に、本土に住む私たちがなさねばならないことの重要性を改めて教えられると思いました。

県民大会は、翁長雄志知事の登場で最高潮を迎えました。翁長知事は「政府は、県民の怒りが限界に達しつつあること、これ以上の基地負担に県民の犠牲は許されないことを理解すべきだ。私は県民の生命と財産、尊厳と人権、そして将来の子や孫の安心や安全を守るべき知事として、このような事件が二度と起きないように先頭に立つ」と表明し、「日米地位協定の抜本的な見直し、海兵隊の撤退・削減を含む基地の整理縮小、新辺野古基地建設阻止に取り組んでいく」とあいさつ、会場は雷鳴のような大きな拍手につつまれました。

大会は「怒りは限界を超えた」「海兵隊は撤退を」というプラカードが一斉に掲げられました。会場は沖縄県民の怒りの渦が巻き起こりました。最後に大会決議を採択して終わりました。

翌20日は、ひめゆりの塔、平和祈念公園やガマを訪ね帰路に着きました。そこには戦争の悲惨さを、これでもか、と見せつける姿がありました。沖縄行きに際してカンパや寄せ書きの協力をいただきました。改めてお礼を申し上げて報告とします。